

キラリ TOKYO

—輝く企業の現場から—

第169回 株式会社浜野製作所



ガレージスマダにはスタートアップの入室やデジタル工作機械の他、共用ラウンジにはバーカウンターなども設置されている。(写真左から)取締役 副社長の小林亮氏、代表取締役CEOの浜野慶一氏、取締役 副社長の宮地史也氏

ものづくりイノベーションの開発拠点「ガレージスマダ」

株式会社浜野製作所は、金属の部品加工だけでなく、さまざまな企業と組んで装置・機械の設計や開発、製造を行っているメーカーだ。たとえば、多くのメディアで紹介されている株式会社オリ研究所の小型ロボット「OriHime (オリヒメ)」(上記写真・『アークス』2019年4月号でも掲載)は、浜野製作所が創業時に支援した。他にも、新スタイルのパーソナルモビリティを提供する「WHILL (ウィル)」、垂直軸型マグナス風力発電機の実用化に挑戦する株式会社チャレナジールなど、名だたるベンチャーを支援している。

「オリ研究所を支援したのは、代表取締役CEOである吉藤オリくんの『病氣や障がいなどで孤独を感じている人々をロボットで救いたい』という思いに心打たれたからです。当社の技術や設備を提供すれば、吉藤くんのように高い志を持つベンチャーを支え、彼らの思いを世の中に届けることができると考えました」(浜野氏)

その思いが結実したのが、2014年に完成した施設「Garage Sumida (ガレージスマダ)」である。

「高度成長期、1970年頃の墨田区には約10,000社の町工場

がありましたが、今では約2,000社程度*までに減少しました。こうした傾向は大田区や東大阪市など日本全国のものづくり企業の集積地域で起きています。でも、町工場が培ってきた技術や情熱が断絶してしまったら、先進国である日本からは二度ともものづくりの文化は生まれてこないでしょう。そこで私たちは、社会課題を解決する企業をものづくりで支援し、東京の地域性を最大に活かしたものづくりの情報の上流から仕事をする事で、『下請け』といわれる私たち中小製造業の仕事の在り方を変え、ものづくりの現場の力を活かして新しい価値が生まれる関係づくり・仕組みづくりに取り組んでいます。その拠点が、ガレージスマダです」(浜野氏)

中小企業が連携すれば素早いものづくりが可能

浜野製作所はこれまで、産学官金で共同開発した電気自動車「HOKUSAI」、世界で初めて深度7,800メートルの動画撮影に成功した深海探査艇「江戸っ子1号」など、多くの共同プロジェクトに参加してきた。そして2019年には、遠隔操縦が可能な小型電気自動車(EV)「バトラーカー」の開発にも携わった。

「全体的なプロジェクトマネジメントを、欧州系の戦略コンサルティングファームの日本法人が担当し、『和ノベーションチーム』と

※参考:「平成28年経済センサス-活動調査」(総務省統計局)

ものづくりの現場の力から**新たな価値**を創出

[会社概要]

代 表：代表取締役 CEO 浜野慶一氏
業 種：各種装置・機械の設計、開発、製造、板金加工、
金型設計など
資本金：2000万円
従業員：54名（2020年10月現在）
所在地：東京都墨田区八広4-39-7
T E L：03-5631-9111
F A X：03-5631-9112
<https://hamano-products.co.jp/>



情報発信を心がける

「他企業などとのつながりを増やすために大切なのが情報発信。当社が取り組むプロジェクトの動きや、それに賭ける思いなどを積極的に伝えることで、共感してくれた方がご縁を運んでくださる。そこから新たな挑戦につながることもあります」（浜野氏）



学ぶ意欲のあるスタッフに対して、学費をサポートするなど、制度づくりにも力を注いでいる。現在、大学院に通いながら働くスタッフも。



深海探査艇「江戸っ子1号」は、浜野製作所をはじめとする下町の町工場が協力して実現したプロジェクトだ(写真提供:江戸っ子1号プロジェクト推進委員会、江戸っ子1号)



浜野氏は、講演や各種パネルディスカッションなどにも積極的に参加し、自社の取り組みについて情報発信をしている

呼ばれる当社を含めた10社が、プロダクトデザインや内装、自動運転制御などを受け持ちました。当社は車体部分など、総合的にハードウェアを手がけました」（浜野氏）

パトカーの開発期間は、わずか4ヵ月間。これほど短期間で完成できたのは、プロジェクト参加メンバーの多くが中小企業だったからだ、浜野氏は考えている。

「大企業は、会議を重ね綿密な計画を立ててから製品づくりに取りかかるもの。そのため、製品化した頃には時代が変わっていることもあるかもしれません。ところが中小企業なら、経営者がやると決断したら、すぐ製品化に取り組めるのです。

今は変化のスピードが速まり、新たな社会課題が次々に生まれる時代。ですから、得意分野を持つ中小企業が集まり、短期間で具現化するやり方は、とても時代に合っているのではないのでしょうか」（浜野氏）

中小製造業の可能性を世界に向け発信する

これまでの中小企業は、大企業の下請けという役割だった。しかし、こうした構造は変わっていくのかもしれない。

「今後は、小回りのきく中小企業がプロトタイプを開発し、大企

業に量産化を担ってもらえるケースが増えるかもしれません。従来の『大企業が上、中小企業が下』という先入観は捨て、さまざまな企業と横のつながりをつくろうとする発想力と行動力が、未来を切り開いていくのだと思います」（浜野氏）

浜野氏は現在、中小企業の経営者や社員がワクワクしながら働ける環境を整えるため、力を注いでいる。

「当社は、『HOKUSAI』や『江戸っ子1号』等、中小製造業の可能性を広げるプロジェクトに関わってきました。町工場も、工夫次第で新たな挑戦はいくらでもできるのです。

事業構造を変革し、ものづくりの価値を高めていく。そうして日本のものづくりを継承していくことが、今の私の目標です」（浜野氏）

取材後記

浜野さんに初めてお会いしてから15年。一貫して感じるのは「壁のない方」ということ。世界的なVIPだろうが、地元のもつ焼屋さんであろうが、たぶんフラットに接しておられるはず。お客さま、職員、地域に感謝し、おもてなしの心で接するという経営理念の源は、恐らくそこにあるのではないかと。その理念に呼应し、さまざまな人や情報が集まり、活気にあふれる浜野製作所は、未来の東京が目指す「強い中小企業」の理想形だと思うのです。（総務課 大場 順二）